

# 宗岡中だより



5月号 平成30年5月1日(火)  
志木市上宗岡1-8-1 TEL 048-471-2241

## 「新河岸の 土手吹き抜ける 青葉風」

校長 佐藤哲浩

花粉症が収まらない中、新緑の美しさに惹かれ宗岡中から志木市役所までの新河岸川の土手を散歩しました。草木が強い青葉風に吹かれ上に伸びようとする春の息吹を感じます。またこの時期になると、「いろは橋」の横には数十匹のこいのぼりが土手を跨いでつるされ、元気に泳ぎ回っています。新年度が始まって早一月が経とうとしています。新たな中学校生活には慣れたでしょうか。これから暑い季節に向かいますが、規則正しい生活を心がけてほしいと思います。



さて、先日埼玉新聞を読んでいると、「現状打破へ決断」という記事に目が留まりました。4月16日に世界で一番歴史の古い「ボストンマラソン」で日本勢31年ぶりに優勝を果たした川内優輝選手が来春からプロに転向することを表明したことです。異色の公務員ランナーとして、仕事も競技活動も一生懸命取り組んできた川内選手は、「文武両道」、学業と部活動の両立を求めている中学生には、目標となる存在であり、とても良い刺激になっていたと思います。私は、この大きな決断に至った川内選手の背景を知りたく、調べてみたのです。

川内選手は、仕事をこなしながら世界中のレースを走る独特のスタイルを貫いてきた。だが自己ベストは2013年の2時間8分14秒から伸びていない。ボストンマラソンでの快挙を弾みに停滞感を打破するために決断を下した。プロへの思いが芽生えたのは3度目の世界選手権、9位であと一步入賞に届かなかった。12月の福岡国際マラソンで勤務先を退社して競技に専念するようになった弟の鮮輝が、大幅に自己記録を縮める姿を見た。「このままで良いのだろうか？」と危機感が募る中、ボストンマラソンの優勝で賞金15万ドルを得て、活動資金に一定の目処がついたことが決め手になった。

プロになれば今まで難しかった長期合宿も仕事に迷惑をかけずに実施でき、今までより自由に参加する大会を選ぶことが可能になり、出場報酬も受け取ることができるようになる。伝統と格のあるボストンマラソンを制したことで、「より世界中からオファーが来る」と見込んで、大きなチャンスと捉えている。ボストンマラソンは悪条件を味方につけての優勝でもあり、「純粋な勝負だと勝てない、スピードが足りない」と自覚する。「トップランナーとして勝負できるのはあと5年くらいかもしれない」と語る31歳の公務員ランナーは、他の強豪と同様に競技に専念する道を選んだ。

私は、川内選手のこれまでのマラソン最多完走数(ギネス認定)から、現状を打破したいという強い意志を感じます。是非、MGC(マラソン グランドチャンピオンシップ:オリンピック最終選考会)でオリンピック出場権を獲得し、東京オリンピックでメダルを獲得することを期待しています。そして、学校も「現状維持(例年通り)は後退なり」と改めて感じた次第です。